



安徳天皇行在所跡のカツラ

供御水

かつて安徳天皇の行在所（仮の御所）があったとされる「安徳帝行在所跡」にカツラの巨木が2本ある。両者は対照的な容姿で、南側の南株は、根本近くから二又に分かれていて、目通幹回りは6.80m、樹高25.0m、推定樹齢400年、一方、北側の北株〔写真〕は、幹の所々に“コブ”ができていて、サイズはそれぞれ4.66m、30.0m、250年である。共に、平成16（2004）年に「町指定天然記念物」に指定されている。

カツラは日本固有種の植物で、氷河時代以前までは地球上の至る所に存在していたが、現在では地球上で日本で見られないという、極めて希少価値の高い木である。カツラは、“生きた化石”で、花粉化石は恐竜が栄えた中生代白亜紀〔少なくとも7000万年以前〕の地層からすでに発見されている。日本からは、北海道の新生代古第三紀始新世の地層〔約4000万年前〕からカツラの仲間の葉の化石が見つかっている。ちなみに、京都市西京区桂川西岸地域を「桂」と呼ぶのは、嵐山南の松尾近辺（南）にかつてたくさんの桂の木が生えていたことによる。

材は緻密で、古くから家具や仏像・面（能面を除く）・和楽器・碁盤の材などに広く利用されてきた。『カツラ』の名の由来は、秋に黄葉すると醤油のようなほのかな甘い香りがすることから、“香出（香りが出る）”によると言われており、別名「香の木」ともいう。

行在所跡は南北17～32m、東西40～45mの楕円状の小丘陵地で、北側には遊歩道との間に小さな沢が流れて

いる。普段は余程の雨が降らないと水は流れないが、10月3日に訪れた際には、前月30日に襲来した台風による豪雨の所為が珍しく水が流れていた。安徳天皇は、この北側の小尾根にある「平安社」（あせびが森）から、北東方向に京の都の平安宮を拝したと伝えられている。

行在所に関しては、興味深い史料がある。土佐を代表する江戸時代の歴史書である『南路志』に、「鞠の場は中の宮より本宮に行間二在」とあり、安徳天皇が従臣たちと蹴鞠をされたこととされることに由来する字名である「鞠の場」は、現在の「安徳帝行在所」以外には考えられない。ちなみに、「中の宮」は現・杉原神社、「本宮」（上の宮ともいう）は現・横倉宮のことである。安徳天皇を率いる平家一門が、屋島檀ノ浦の戦いの段階で四国に上陸して四国山地の尾根伝いに西進し最終的にここ横倉山を終焉の地とされたというのが越知町に伝わる伝説であるが、江戸時代にすでにこのような奥深い山中に“安徳天皇が蹴鞠をして遊ばれた地”という意味の字名が存在していたことは、安徳天皇潜幸伝説があながち架空のものではない気がする。

行在所跡の南東端を10mほど下った所の蛇紋岩の割れ目からは、安徳天皇の飲み水にされたという「供御水」と呼ばれる清水が湧き出している。下流にある『日本名水百選』（旧環境庁指定）の「安徳水」の源流に当たる。その存在はかなり以前から言われていたが、5年ほど前その場所が確認された。ミネラルを多く含み大変まろやかな口当たりのいい清水である。

横倉山南斜面の見どころ

安井 敏夫

2018年4月28日(土)、若葉萌える新緑の快晴の下、横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」の行事として、普段はほとんど行くことのない横倉山南斜面を散策する。

市山集落から、かつてはるか上方の採石場から切り出した石材“土佐桜”(石灰岩)を木馬(「きんま」とも)で運び出した旧木馬道を通り、植物観察や地層の勉強をしながら山の中腹に向かう。ツツジはほとんど終わり(一部上の方にオンツツジが残っていた)、ハルゼミがかすかに鳴っていた。

主な観察ポイントは、以下の通りである。



〔鬼石垣〕

①鬼石垣

小字「鬼石垣」と呼ばれる場所にある、大きな石ころを積み重ねた石垣のような地層で、その名の由来は、“人間ならぬ鬼が築いたと思われるほどの大規模な石垣”ということにあるようである。地質学的には、石灰岩の大小の角礫が炭酸カルシウム(CaCO₃)で膠結(セメント化)されて岩石となった「石灰角礫岩」で、日本国歌に詠われている“さざれ石”のことである。醍醐天皇の下命による905年撰(成立は913年頃)の最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の中に「詠み人知らず」の歌として『我が君は千代に八千代に さざれ石の巖となりて 苔の生すまで』で載っている。この種の岩石は、大きな石灰岩体の周縁部にはよく見られ、さほど珍しいものではないが、ここのものは、一つ一つの礫が大きく人頭大以上のものもあり、その点では珍しいと言える。規模も大きく、高さ(地層の厚さ)は2m以上にも達し、かなり長い距離にわたって続いている。見かけ上約45°南(実際には北東)に傾斜している。ちなみに、全国の神社仏閣、公園には“さざれ石”が飾られている所が多



いが、^{さざれいし}細石が石灰岩でなく、普通の礫岩である場合もある。

鬼石垣の足元には、牧野博士が手紙の中で「越知の横倉山にヤマアイが生じています。私の知る処では他に無い様です。就いては高知植物園が出来たら其園へも栽えたら好いと思ひます。」と云って珍しがっていた「ヤマアイ(山藍)」(トウダイグサ科)がたくさん自生していた。ヤマアイは、古くは葉を藍染の染料としたが、徳島の藍染のアイ(藍)ほど藍色は強くなく、後者はタデ科の植物で、インドシナ原産で古く中国を経て日本に渡来したもので、両者は全く異なるものである。

②赤滝洞穴

山の斜面にぽっかり開いた小規模な洞穴で、南斜面に広く分布する陸上火山活動の産物である酸性凝灰岩中の形成されている。恐らく地層の境界の弱線部に雨水が徐々に浸透し浸食されて形成されたものであろう。

③旧採石場跡

市山集落のほぼ真上に当たる山頂付近で採石された、



〔旧市山採石場〕

〔横地見洞穴〕(内部から)



何ヶ所かある中で最も規模の大きな採石場跡である。それまで切り出した原石を木馬で山の下へ運んでいたものが、ワイヤーで吊るしてトラックで積み出し口まで運んだためである。石材は淡いピンク色をした4億年前の日本最古の石灰岩で、県内はもとより、全国至る所で建築用石材として使用された、一世を風靡した高知県を代表する石材の一つである。これまで県内で最も大規模に使用されていた旧高知市民図書館が取り壊されたが、今度新しくできた図書館「オーテピア」一階の休憩室の壁の一部に再利用され、「かつて赤道付近の、オーストラリアの近くでできたサンゴ礁の化石が石灰岩となったもの」というロマンを漂わせている。

石切り場の東端には、日本原産で唯一の柑橘類である「ニッポンタチバナ」(ミカン科)の古木が3本ほど自生している。

④横地見洞穴

沢の左岸に横向きに形成された洞穴で、第一洞穴、第二洞穴とあり、後者の方が天井高も高く規

模が大きい。赤滝洞穴と同様に酸性凝灰岩中に形成されていて、浸食された後、崩落してできたものと思われる。この日もキクガシラコウモリがいたが、以前はハクビシンも生活していた。

この他、今回は行かなかったが、三角点(774m)のすぐ東の尾根近くの石灰岩中に南向きに開いた、四国で二番目に深い堅穴(約50m)もあり、横倉山南斜面には、平家伝説以外のいろんな自然の見どころがある。

越知町では、この良質の日本最古の大型化石産地であり、多くの見どころを有する南斜面を数年前に購入し、化石・植物等の自然資源の保護も含め、観光開発することになった。

(やすい としお/横倉山自然の森博物館 学芸員)

骨の発生と進化

安井 敏夫

脊椎動物特有の体を支える硬い組織である「骨」が、一体いつどのようにして発生したのかという問題は大変興味深いものがある。

地球上に少なくとも約38億年前原始の海に単細胞の生命体が誕生して以来、生物は長い年月をかけて次第に高等動物へと進化していくことになる。そんな長い生命の歴史の中で、今から約5億3000万年前には、それまでと比べいろんな形、生活様式をもったさまざまな種類の生物が個体数の上からも爆発的に多くなり、「バージェス動物群」

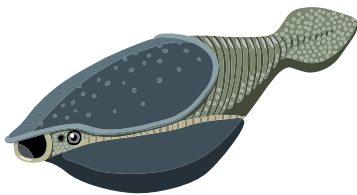


ピカイア

と呼ばれる、現在知られる無脊椎動物の大部分の門が出現することになる。この現象は“カンブリア爆発”と呼ばれる。このような生物の中に、体長3~6mmほどの「ピカイア」という生物がいた。この生物の特徴は、体内に頭部から尾部にかけて「脊索」と呼ばれる「脊柱(背骨)」に似た器官があり、“脊椎動物の祖先”と考えられている。これとよく似た現生動物に、原索動物のナメクジウオがある。原索動物と言え、古生物学上有名な「コノドント」や「筆石」と呼ばれる化石動物がある。前者は、“コノドントアニマル”と呼ばれる体長6mmほどのドジョウのような形をした動物で、その口の部分にあった器官がコノドントである。リン酸カルシウムを主成分とすることから脊椎動物の歯のようなものであったと考えられ

ている。日本では、日本最古の化石として古生代オルドビス紀〔約4億5000万年前〕のものが横倉山と岐阜県内の二ヶ所で見つかっている。一方、後者は、古生代を代表する示準化石^{しじゅんかせき}で、ある種の筆石が西洋の羽根ペンの形に似ていることからそう名付けられた。日本では唯一横倉山の4億年前の地層（石灰岩）から見つかっている。

その後、何故か「バージェス動物群」のほとんどの動物は絶滅したが、「ピカイア」だけが生き残ることになる。今日の我々脊椎動物の人類が存在することになったのも、このピカイアが生き残ったからだと言っても過言ではない。



アランドスピス (友永 たる・画)

脊椎動物の祖先が現れてから6000万年後の約4億7000万年前、ついに最初の脊椎動物が現れた。「アランドスピス」と呼ばれる、顎をもたない無顎類^{むがくろい}の魚であ

った。ただし、体の前半分は、表面が硬骨性の外骨格・骨板（骨質の皮）で覆われていたものの、内骨格は軟骨であった。胸鰭や腹鰭もなく尾鰭だけで、ほとんど泳げなかった。ちなみに、現生ではヤツメウナギが無顎類に属する。

アランドスピスの出現以降、魚類は多様性を増し、一層発展・繁栄していくことになる。時代は、4億年前後の話である。この時代は、全地球的にサンゴ礁が発展した時期でもあり、海水中の二酸化炭素を吸収して酸素を放出し、生物にとって有害な太陽からの紫外線を吸収するオゾン層が大気圏上空に形成されたため、植物が上陸することになる。植物の上陸により、やがて湿地帯や森が形成され、造山運動の結果、降った雨が川となり、魚類の中から、海から湿地帯・川に進出するものが現れるようになる。ただ、問題となるのが、生物にとって必要なカルシウムなどのミネラルの摂取で、海水中には豊富であったものが、淡水中ではわずかしかな含まれな



プテラスピス

るために発展したのが「骨」である。初期の軟骨からリン酸カルシウムを主成分とする硬骨を作ることによって、生物が生きていくためになくはならな



い必須のミネラル・カルシウムが不足した時、いつでも血液中に溶かすことのできるリン酸カルシウムの形として骨が存在するようになった。つまり、骨の本来の役割は“カルシウムの貯蔵庫”であったのである。

硬骨を獲得した魚類は、その後川・海に多種多様な進化を遂げていくことになるが、何よりも背骨とその回りに発達した筋肉が付着することによって、俊敏な動きが得られ、エサをすばやく捕獲できるようになったし、外敵（捕食者）からも逃げ出すこともできた。

このようにして見ると、骨（硬骨）の発生・発達が如何に革命的で、生物の進化・発展に大きな役割を果たしたかが理解できる。

生命の誕生から30億年ほど経って、やっと骨をもつ魚類が誕生し発展していったが、その中から胸鰭^{むなびれ}と臀鰭^{しりびれ}の中に骨をもった、シーラカンスの仲間の総鰭類^{そうきりょう}が現れた。その代表的なのが「ユーステノプテロン」である。前後4本の鰭の中に骨があって、それが手足の役割を果たし、水中から陸上へと進出していったのである。初期の両生類の「イクチオステガ」に頭部の骨格が似ていることから“両生類の祖先”と考えられている（ただし、両生類の祖先は肺魚類であるとする説もある）。ここでも、生物の進化・発展に骨が大きくかかわっているということがわかる。

魚類といえば、スコットランドに典型的に発達する、古生代シルル紀～デボン紀の“カレドニア造山運動”によって形成された山地の周辺に堆積した「旧赤色砂岩層（Old Red Sandstone）」中に、デボン紀の豊富な魚類化石を産する。この魚類の中に原始的な魚類の代表格である「甲冑魚^{かっちゅうぎょ}」がある。無顎綱の中の甲皮類に属し、体が骨



甲冑魚

性の皮甲で覆われ、“最古の脊椎動物”といわれる。化石として残るのは不思議と頭部だけで、胴体～尾部は残っていないことから、両者の成分が

異なっていたと考えられる。甲冑魚は、古生代カンブリア紀後期からデボン紀末まで、主に淡水域に生息したが、一部は海域にもいた。顎がなく(無顎類)、口から微生物を含む水または泥を吸い込み、鰓でろ過してエサを食べていた。現生では、円口類のヤツメウナギが甲皮類から由来したと考えられている。当館にも、カナダ産の甲冑魚の化石が展示されているが、やはり頭部のみで、胴体～尾部はない。横倉山を構成する4億年前のシルル紀の地層が堆積した頃すでに出現していた。横倉山を構成する地層も、シルル紀～デボン紀のものなので、将来魚類の化石が見つかる可能性もある。現在、日本からは、古代魚としては、昭和63(1988)年に岐阜県下のデボン紀〔4億1700万年～3億5400万年前〕の地層から板皮類の甲冑魚の

部分化石が見つまっているだけである。

骨を獲得した動物は、その後生活環境・生活様式に応じて、長い年月をかけてその形や構造を変え、爬虫類・鳥類・哺乳類へと進化していき、やがて脊椎動物の頂点に立つ人類が誕生することになる。人類そのものも、猿人・原人・ネアンデルタール人・クロマニヨン人と、その骨格・体形を変化させつつ我々現生人類(ホモ・サピエンス)へと進化していった。

脊椎動物の進化は、骨の形成・発達とともにあったといえることができる。

〔参考文献〕:「ながいながい骨の話」(講談社)

(やすいとしお/横倉山自然の森博物館 学芸員)

博物館行事

企画展：中西安男写真展

『追われゆく命—知られざる野生動物の世界—』

2018年4月7日(土)～6月10日(日)



私たちの知らないうちに、世界中の野生動物が絶滅または絶滅の危機に瀕している。日本のトキは既に絶滅したし、高知県が最後の生息地であったニホンカワウソもすでに環境省から絶滅宣言がなされた。四国に関して言えば、ツキノワグマは今や剣山系にのみ生息域が限られ、その数も十数頭～50頭未満といわれ、もはや絶滅寸前の状態にある。国の特別天然記念物であるニホンカモシカもニホンジカの繁殖により生活圏を奪われ、エサ不足で餓死する例も起きている。

このような状況の中、今回野生動物写真家・中西安男氏(高知市)が長年かけて苦心して撮影した、国内外の野生動物の姿を写真で紹介する写真展を開催した。絶妙のタイミングで“瞬間”をとらえた、追われゆく野生動物の自然体が映し出されている。一見愛らしくもまた勇姿の裏に、自然の中で生きていくための厳しさが伝わってくるような作品である。

主な感想として、「動物の表情を実に細かく良く撮られている所が素晴らしい」「一枚一枚が素晴らしい写真展でした。確かに人間が地球上で最も狂暴で危険

な存在であります」「ほんとに壊すのも人間、守るのも人間ですね。人間がちゃんと自然との共存を考えなければいけない時だと思います」「動物の保護の大切さを感じました」「自分たち人間の勝手に野生動物が住みにくい世界になるのはとても悲しいです」「絶滅危惧種という言葉は一見自然に失われていくように聞こえるが、そうさせたのは全て人間というところが罪深いと思います。」(兵庫県)「写真を見て、やせいのいきものの命をとらないであげたいと思った」(学童)などがあつた。

ギャラリートーク

2018年4月29日(日)・5月13日(日)

〔講師：中西安男、聴講者 各20余名〕

企画展関連イベントとして、企画展会場で映像を使って『ギャラリートーク』を開催する。

「動物写真の魅力は“瞬間”にある」

「四国のニホンカモシカは、ニホンジカの増加で絶滅の危機にある」

「カモシカはなわばりを持っているため、ニホンジカの過剰の増加により、えさがなくなると餓死してしまう」

「観光のための餌付けはいろんな問題がある」

などのトークがあつた。



企画展：『第40回 高知県写真家協会展「土佐」』（選抜移動展）

2018年6月16日（土）～6月30日（日）

高知県の自然・風物、伝統行事、祭り、行事などを対象に、郷土の良さを紹介。

カメラアングル、シャッターチャンスなどを駆使したものの、芸術性の高いものなど78点と特別展示の『人生の先輩たち－寿齢賛歌－』の作品10点の計88作品が並んだ。ちなみに、本展の『高知県写真家協会展』は今年第40回目を迎えた。

夏休み博物館教室『オリジナル万華鏡作り』

2018年8月11日（土・祝）〔講師：日本リサイクル万華鏡協会 橋本優氏、参加者：午前の部 9名、午後の部 13名〕



毎年恒例となった、廃材を使った、模様が変わると変化する夢のある万華鏡作り。各自名々の自分だけの“オリジナル”な万華鏡である。最近では、講師の方で材料を事前に準備してくれるので、回を重ねるごとに製作時間が短縮され、今回は1時間ほどで完成することができた。

余った時間で、前回と同様、牛乳パックを使った“パタパタふくろう”を作った。「こんな万華鏡は初めて見

ました。感動です。『うわーきれい。めっちゃくっちゃきれい！』と親子で歓声が上がりました」「パタパタふくろうは、作るのが難しかったけど、出来上がったならうれしかった」などの感想があった。

夏休み博物館教室『勾玉作り』

2018年8月18日（土）

〔講師：公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター 坂本裕一氏・江間盛男氏、参加者：21名〕



縄文時代終わり～古墳時代にかけて、装身具（首飾り）や祭祀に使われ、また“三種の神器”の一つとして知られる「勾玉」。

材質にも水晶・滑石、形にもC形・X字形・子持ち勾玉などいろいろあるようである。粘土で作っ



たC形の勾玉は「洪水がおきないように」と神に捧げたものらしく、子持ち勾玉が「子供がたくさん生まれますように」との願いで作られたように、勾玉には“何かしらの願い事”が込められているようである。

勾玉作りは、全体的におもしろかった、楽しかったようで、「勾玉を作る時、丸く磨くところが難しかったけど、きれいにできてうれしかったです」などの感想があった。

夏季企画展：『ほねほねカーニバル』

2018年7月21日（土）～9月2日（日）

人間を始めとする脊椎動物の骨格を構成する硬い組織で、体を支え、内臓諸器官を保護し、またカルシウムを貯蔵するなどさまざまな役割を有する「骨」について、いろんな観点からその特性・意義について考える。特に、進化・構造（仕組み）・働きなどについて、いろんな動物の骨の特徴から探る。同時に、骨格標本の作り方、特に標本製作の過程もイラスト・道具類を使って紹介。

主な感想として以下のようなものがあった。子供の感想としては、「おもしろかった」「たのしかった」が圧倒的に多く、「めったに見れない動物や骨が見れておもしろかった」「いろいろな骨を見てうれしい。なかなか骨を見るきかがないから勉強になった」「自由研究に使える。骨の勉強になった」「にんげんのづかいこつが男女でちがうことがびっくりした」や「骨だから分かることがいっぱいあって楽しかったです」といった高等なものまであった。一般の感想としては、「動物と骨の形態がとても分かりやすく良かったです」「色々な動物の骨格と剥製を同時に見れて楽しかった」「標本の作り方を丁寧に、かつイラストでわかりやすく展示しているのが印象に残った」「骨と剥製が並んでいるのがよかった！標本の作り方のイラストがよかった」「これまで骨について考えたことがなかったが興味がわいた」「骨のQ&Aコーナー大変勉強になりました」。その他、企画展ではなく常設展の「トリケラトプスの骨はびっくりした」などの感想もあった。



関連イベント

《ホネならべ》

2018年8月12日(日)
バラバラにしたカモシカとタスキの骨を、その形・特徴をもとに全体像を組み立てるワークショップ。



脊椎骨や尾骨が、同じような形をしているものが複数あり、難しかったようである。

《ホネホネちょミット》

2018年8月25日(土)～26日(日)
いろいろな動物の骨の魅力に惹かれて収集、調査・研究している全国の個人や団体が、自慢の骨を持ち寄り、展示・解説する“ミニサミット”。博物館の2階展示室、3階展望ロビーに各ブースを構え、さまざまな骨を披露。魚類・金魚・クジラ・ナウマンゾウの化石・貝類・ウニ・頭骨の

3D拡大模型・鳥類の剥製(製作過程)等々が出揃い、日頃あまり見ることのないいろいろな骨が観れるとあって、大勢の“骨ファン”で賑わった。

両日、各2名、計4名による「ホネホネ発表会」が開催され、各々の製作技術・研究成果・活動などの紹介があり、聴講者からは「魚類の頭蓋骨は何故人間と違って複雑、多くのパーツからできているのか?」といった講演者泣かせの質問も飛び交い、有意義な発表会であった。

〈ブース出展者〉

国立科学博物館・なにわホネホネ団・黒潮生物研究所・高知大学大学院・高知追手前高等学校科学部・魁!!骨塾・他剥製師など個人3名



友の会だより

「横倉山南面散策」

2018年4月28日(土)

〔案内者：斎藤政広、参加者：17名(内 事務局3名)〕



横倉山の南斜面は、石灰岩や火山岩及び火山性の地層から成り、地形が険しく急峻であるが、北斜面とは異なり原生林は残っていない。その代り、北斜面には見られない、四国で二番目に深い竪穴洞穴を始め大小3つの洞穴と“鬼石垣”と呼ばれる大規模な石灰角礫岩(“さざれ石”のスケールの大きいもの)、石材「土佐桜」の旧

採石場など、いろいろな見どころがあり、それらを散策ルートとして検証した。

「仁淀川水質調査」

2018年6月2日(土)〔参加者：10名(内 事務局3名)〕

『身近な水環境全国一斉調査』の一環事業で、今年も仁淀川(本流)、仁淀川の支流・坂折川、町内を流れる梅ノ木川の3カ所で行う。それぞれの地点におけるCOD値(化学的酸素要求量)は、「2～1」「3～4」「8以上」で、仁淀川では、水質が極めて良い上に、アユ・ウグイ・ハヤ・オイカワなどの魚類を始め、テナガエビ、カジカガエル、それにカワゲラ・トビゲラなどの水生昆虫の見られる豊富な生物相が保たれている。坂折川では、上流にダムがあるため本流よりは若干水質が劣るが、水性昆虫の数は豊富である。梅ノ木川は、人家の過程排水が直接流入するため、水辺に水質を浄化する草で覆われていて、見た目には優しいが、水質は極めて悪い。

「炭焼き体験」

2018年6月16日(土)

〔指導者：斎藤政広、参加者：14名(内 事務局1名)〕

すでに梅雨に入っているが、梅雨の中休みのさわやかな日和であった。窯から焼き上がった炭を出し、続いて切ってきた生の原木を窯に入れる作業を行った。

次に炭出しをするのは6月中もしくはそれ以降ということである。

「横倉山ヒメボタル観察会」

2018年6月26日(火)

〔参加者：19名(内 事務局4名)〕

霧雨の降る下での観察となったが、大勢に影響はなかった。ヒメボタルは、20余匹くらいであったであろうか、例年と同じ程度であった。

発光キノコのシイノトモシビタケは、30余本くらいで、一頃の200余本から比べるとはるかに数は少ない。雨の少ない今年の天候が影響しているのかもしれない。一方、ギンガタケの方は、昨年は木の幹に着生しているものの発光していなかったが、今年はびっしりと着生し、神秘的なほのかな青白い光を発していた。

「おちぞら★夏の星観察会」

全国星空継続観察(環境省) 関連事業

2018年8月8日(水)

〔指導者：片岡重敦、参加者：10名(内 事務局3名)〕

天の川周辺の星の見え方を肉眼で観察し報告する。また、宵の金星や木星・土星、15年ぶりの大接近となった天体望遠鏡で観察した。始めは薄雲が広がっていたが、次第に晴れてよく観えた。

横倉山ミニ歳時記

■ 1㍎級のオオサンショウウオ久し振りに見つかる

2018年5月16日、越知町内の仁淀川支流・久方目川で、国の特別天然記念物で“生きた化石”のオオサンショウウオが見つかった。体長110㍎、体重9.1㍎の大型の個体で、川を仕切る高さ50㍎ほどの堰（段差）を越えられずウロウロしていたという。専門家のお話では「オオサンショウウオは、繁殖場所を探る際、水流に逆らって上流に上る習性がある」らしく、繁殖のための遡上には少し早い、数日前の豪雨で増水した支流を本流と間違えて上って来た可能性がある。1㍎を超える大型の個体の発見は、町内では2001年以降の17年振りで、この時も体長は同じ110㍎であった。ちなみに、このサイズは、大豊町で見つかった120㍎に次ぐ県下で二番目に大きい個体である。大型のオオサンショウウオが見つかるということは、それだけ水質の高さ・えさの豊富さなどの川の環境が良いことを意味する。



今回見つかった個体は、駆け付けたNPO法人四国自然史科学研究センター（須崎市）と高知市の「わんぱくこうちアニマルランド」の職員が、個体識別用のマイクロチップを体内に埋め込んで、下流の仁淀川本流に放流された。「仁淀ブルー」として定着した清流・仁淀川に、「清流のバロメーター」として、いつまでも生き続けて欲しいものである。

【博物館日誌（抄）・平成30年度博物館行事予定】

- 3月27日（火）
博物館協議会
- 4月7日（土）～6月10日（日）
春季企画展：中西安男写真展
『追われゆく命～知られざる野生動物の世界～』
- 6月16日（土）～30日（土）
第40回高知県写真家協会展『土佐』（選抜移動展）
- 7月21日（土）～9月2日（日）
夏休み企画展：『骨のはたらきとしくみ』（仮称）
- 8月11日（土・祝）
夏休み博物館教室：『オリジナル万華鏡作り』
- 8月18日（土）
夏休み博物館教室：『勾玉作り』
- 9月29日（土）～平成31年1月27日（日）
秋から冬季企画展：『ほねほねカーニバル』
（展示が3回変わる）
 - 9月29日（土）～10月28日（日）〔魚の透明標本〕
※10月28日（日）「ホネホネお話し」
 - 11月10日（土）～12月16日（日）〔鯨と魚の骨〕
 - 12月22日（土）～平成31年1月27日（日）
〔動物園の人気者の骨〕
- 11月2日（金）～4日（日）
武政健夫ガラス彫刻『光と陰が刻む透明の世界』

【博物館友の会「フォレストクラブ」・平成30年度活動予定】

- 4月15日（日）〔道路工事中のため中止〕
《土佐の投入堂》聖神社見学とアケボノツツジ観察会
- 4月28日（土）
横倉山南面散策
- 5月22日（日）
友の会運営委員会
- 5月26日（土）
友の会総会
- 6月2日（土）
『仁淀川水質調査』
- 6月26日（火）
横倉山ヒメボタル観察会
- 8月8日（水）
おちぞら☆夏の星観察会
- 10月10日（水）～12日（金）
無料コーヒーサービス
- 10月20日（土）～21日（日）〔一泊二日〕
視察研修
松江城（国宝）・小泉八雲旧邸・小泉八雲記念館
城下町（武家屋敷など）・メテオプラザ（美保関隕石）
- 11月6日（火）
おちぞら☆秋の星空さんぽ
- 11月（予定）
杉原神社旧表参道を歩く
- 2019年1月1日（火・祝） 初日の出を横倉山で

高知県越知町立

横倉山 自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.lg.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円（※各20名以上）
高校・大学生……………400円（上の団体は100円引き）
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知 — JR特急 約30分 — 佐川 — バス 約15分 — 越知
JR普通 約50分

